

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

(財)日本イタリア京都会館は、4月1日より公益財団法人 日本イタリア会館 になりました。

イタリアそろばんの旅⑫

* ナポリへ ② *

木下 和真

イタリアで窓口に長蛇の列ができていうことは、「覚悟して待て」を意味する。そして、ゆうに二十分は待ったうえ、やっとのこと窓口で、「ヴェローナに帰りたい。夜行の列車のチケットを買いたい」

と言ったが、帰ってきた言葉は「今日は無い」の一言。愛想のかけらすらなかった。

何か別に方法は無いの… すぎるような顔をしてみるも、「次」と列の外へ追いやられてしまった。

しばし、茫然と立ちすくむも、どうにかせねばならぬことに変わりはない。まずは駅の旅行案内所に向かう。パスポートを持っておらず、ホテルにも泊まれない旨を伝える。やはりここでも、「パスポートがないと泊まれない」の繰り返し、無くしたのなら、警察に行けと言われた。

海外で警察にかかわるのは気の進まないことだったが、仕方なく駅の警察で事情を話してみることにした。すると、すぐに

「紛失したのか？」

と問い詰められる。

「紛失はしてはいない。ヴェローナの金庫にある」と言う、

「じゃあ、ヴェローナに取りに帰れ」と言う。

それができたら、警察なんてたよらない……

どこで助けを求めても同じことの繰り返し。もう、どこでもいい。夜行に乗れば、夜は越せる。そして、駅の時刻表で調べたところミラノ行の夜行列

車がある。再度、長蛇の列に並んだ。



【ナポリ中央駅】

ミラノ行のチケットを手に入れ、数時間後、やっとのことでナイトレインのコンパートメントにたどり着いた。カプリ島は残念だが、ナポリで野宿することを考えると、寝床があるだけでありがたい。

ナポリでは列車の中も騒々しい。コンパートメントに入ってきては「私の座席どこだ」「ここは私のクシェットだ」とあちらこちらでワイワイやっている。気持ちが楽になると、列車内の騒がしさも我慢できる。クシェットに入り、毛布をかぶり、目を閉じる。これでは寝るだけだ。周りの喧騒を聞きながら、休んでいると、列車がゆっくりと動き出した。目覚めればミラノだ。

列車が動き数分経つと、検札が回ってきた。ナイトレインは全席指定の為、駅でガッチャンをする必要はない。

車掌がこちらを向き、切符を出せと合図する。私はだまって切符を差し出した。すると、続けて、「Passaporto(パスポート)」

と言うではないか。まさかここでもパスポートとは。

「パスポートはない」

と告げると、

「ID」

と言う。とりあえず、クレジットカードを出し、名前を告げる。切符の名前と同じだからどうにかならないだろうかと思ったが、あっさりと断られた。もともとから愛想の良くない車掌の表情がさらに曇る。

「ナイトトレインは ID カードがないと乗れない。ここに書いてあるだろ」

車掌はイタリア語でまくしたてる。確かに切符には ID が必要と英語で書いてあった。ナポリに来るときは、普通席で来たため ID は必要なかったのだ。

だからと言ってどうしようもない。ないものはないのだ。諦めて、何も話さずにいると、車掌はさらにまくしたてる。

全部イタリア語で怒鳴られたため、ほとんどのことが理解できていない。けれど、理解できた僅かをつなぎ合わせると、ID を持たずに乗車した場合は無許可乗車扱いになるという。そして、次の駅で警察を呼ぶとのことだった。

警察に突き出すという結論が出たため、車掌は去って行った。

次の駅はローマだ。ローマで降ろされたらどうしよう。どこかに向かう夜行列車はあるだろうか？ 到着時刻は午後九時を過ぎている。そこでローマに放り出されるとどうしようもない。ナポリで野宿も怖い、それがローマに変わったところで大差はない。

しかし、考えたところでどうしようもない。ローマまでは寝れるのだ。ジタバタせず、とりあえず休もう。そう気持ちを切り替えて、わずかばかりの時間をクシェットで寝ることにした。

約一時間で列車はローマに到着する。するとコンパートメントにさっきの車掌がやって来た。今回はもう一人いる。入るやいなや、

「どいつだ？」

「こいつだ」

と言ったやり取りが始まる。

さっさと仕事をすまそうぜと言った勢いで、

「25ユーロ！」

と告げられる。身分証明書なしの乗車は罰金25ユーロのようだ。ここではどんな金額を示されようが、その通り払うより道はない。しぶしぶ25ユーロを差し出す。とりあえずレシートらしきものをもらい、

「もう少しそこでじっとしてろ」

と言われる。

しばらくすると車掌に連れられ、警察官が2人やって来た。

またもや

「どいつだ」「こいつだ」と言ったやり取りの末、警察が私のほうを向く。私は二段ベッドの上の段にあぐらをかき、警察とやり取りを始める。

「ID をだせ」

警察は私に告げた。

「はっ？」

第一に身元を確認するのが警察の仕事かもしれないが、訳が分からない?? ID を持たずに乗車したから、このような状況になっているのに、ID を出せとは…

「だから、無いって！」

そういいながら、クレジットカードやユースホステルの会員証、わずかながらの所持品の中から、名前が書かれているものをすべて出す。

「名前は？ 国籍は？」

一通りのことを聞かれる。

「お前の身元を調べるから少し待っている」

「はい」

警察まで呼ばれるとなるともうあきらめていた。ここで降ろされた場合、コラードさんに助けを求めようか？ といっても今は夜の9時。迎えに来てもらうなんてことになれば申し訳ない。なんなら警察所で一晩明かすこともありだろうか。野宿よりはましだろう。

警察官は何やら書類を記入し、無線でやり取りを始めた。無線機から大きな声が聞こえる。

「名前は？」

「Kinoshita Kazuma」

警察の本部かどこかが、私の身元を調べているのだろう。すると、無線機から大きな声が漏れてきた。

「女か？」

女??? コンパートメント内に張りつめていた空気が一瞬にして崩れた。私も思わず吹き出した。警察官もあきれ顔で顔を見合わせている。

コンパートメント内は3人の乗客、2人の警察官、それに車掌が一人。全員男で三十代から四十代。むさくるしさの極みといえる空間だ。その中で「女か?」という問い。場違い極まりないと同時にイタリアならではの問いといえる。

イタリア語の名詞には文法上の性があり、基本的にoで終わる名詞は男性名詞、aで終わる名詞は女性名詞だ。この規則は人名にも適用される。Corrado(コラード)、Marco(マルコ)といったoで終わるものは男性の、Elisabetta(エリザベッタ)、Mara(マーラ)といったaで終わるものは女性の名前だ。となると私の名前は Kazuma。aで終わるので女性の名前となる。おまけに苗字も Kinoshita なのでダブルで女性形なわけだ。

その後、無線でのやり取りが終了すると、警察官は車掌となにやら言葉を交わし、そのまま立ち去って行った。そして、車掌は投げるように乗車券を私に返し立ち去って行った。何かを言われたのか、何も言われなかったのかもわからず、私は呆然としていた。

すると、コンパートメント内の別の乗客が私に向かって

「You can go to Milano!」

と言った。

「Really?」

と聞き返すと、

「Yes, you can.」

と返事が返ってきた。

ローマで深夜放り出されることは何とか免れることができた。これで安心して眠りにつくことができる。

わたしはほっとすると同時に、周りの乗客に向かって言った。

「I'm really sorry to bother you.」

私の失敗から騒ぎを起こしてしまい、申し訳ない気持ちでいっぱいだったからだ。

すると、彼は一言

「Everything has done!(すべて終わったことさ)

Good night!」

と言い、眠りについた。

コンパートメント内の電気が消えた。毛布をかぶり、目を閉じる。

夜行列車はガタゴトと音を立ててミラノへと向かう。目を覚ますと、そこはミラノだ。せっかくだからレオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晚餐」を見に行こう。予約はしていないが、朝早くいくと何とかないとガイドブックには書いてある。ミラノまで行けば、ヴェローナはすぐそこだ。

ヴェローナに着いたら、コラードさんに「問題はありませんでしたか?」と聞かれるだろう。「問題はありましたけど、何とかありました」そして、「すべて終わったことさ」と、笑って報告しよう。あの旅人のように。



【夜行列車の中】

(当館語学受講生)

イタリア発月刊日本語新聞

COMEVA
Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

RiITALIA -イタリア再発見-

第 11 回

Non capisco gli uomini,

ma le donne le capisco ancora meno.

国司 航佑

あなたの好きな文学作品は何ですか。

こう訊かれたとき、筆者はいつも、夏目漱石の『坊っちゃん』ですと答えることにしている。その際、日本人と話している場合ならば、相手のリアクションは様々である。いやはや、やはりあれは傑作ですな、と相槌を打つ者もあれば、漱石の作品にはもっと良いものがある、と言って反論してくる者もいる。一方、恥ずかしながら読んだことがありませんと告白してくる人は、どちらかといえば少数派であるような気がする。

いずれにせよ、『坊っちゃん』は筆者が深く愛する作品であるから、多くの人に読んでもらいたいと思っている。筆者は去年の夏までイタリアのナポリに滞在していたのだが、その際、イタリア語に訳されたこの小説を、現地地で知り合った人や久しぶりに再会した友人にプレゼントした。下宿先のオーナー兼同居人だったマルコ、親友となったナポリ大学の学生マウリツィオ、お世話になったナポリ大学のマズツキ教授とパルンボ教授、そして、15年前に筆者がイタリアの高校に通っていた時分に英語の先生として面倒を見てくれたブルーノ。彼らの日本に関する知識は、日本語の勉強をいつからか始めていたブルーノを除けば、一般のイタリア人のそれと大して変わらないものであった。だから、プレゼントを渡す際、夏目漱石が近代日本文学を代表する小説家であり、また『坊っちゃん』が今日に至るまで日本人に最も愛された小説の一つであるという情報を、彼らに伝える必要があった。

筆者が熱意をもって売り込んだせいか、彼らはすぐに『坊っちゃん』を読んでくれた。だが、この作品に対して下されたのは、期待していたものからは少しずれた評価であった。マルコこそ、本当に好きになる本に巡り合うことはほとんどないけれど、この小説はその一つだよ、と説明しながら非常に好意的な評価を伝えてきた。が、それ以外の

面々は、非常に楽しく読めたよと譲歩を加えつつも、日本で最も愛される作品の一つであるということ、そして何より筆者がそこまで勧めてきたことの理由は分からなかった、という率直な意見をぶつけてきたのだ。コースケ(筆者の名)はなぜ、ここまで『坊っちゃん』を愛するのか。



【イタリア版『坊っちゃん』 *Il signorino*】

なぜ筆者はこの作品を好むのか——この質問に対する答えは用意されていなかった。日本の知人と似たような話をする場合には、「好き」「嫌い」の意思表示をしたとしても、その理由の論理的な説明が求められることはない。いいよねという共感が得られたときは、その人と気が合うことを推定させるバロメーターになる。その一方で、嫌いだと訴えてくる者を眼前にした場合は、この人と分かり合えるはずがないと頭ごなしに決め付けることになるだろう。いずれの場合も、『坊っちゃん』が傑作である理由を説明する気には、決してならないのである。

しかしながら、尊敬するイタリア人数名から『坊っちゃん』のよさを理解できないという告白を受けたときには、筆者は説明責任を感じざるをえなかった。まずは、欧米文学の有名作品との類似を指摘しながら、解説しようと試みた。つまり、フランスを代表する劇作家モリエールの代表作の一つ『人間嫌い』——これは筆者が特に愛着を感じる作品である——との比較論を展開したのである。この喜劇の主人公アルセストは、文明社会における表面的なコミュニケーションのあり方に不満をもつ若者である。周りの人間の偽善的な振る舞いを

糾弾しつつ、自らの思うところをそのまま言動に移してしまうアルセストは、次第に自らの居場所を失っていき、最終的には、人間社会を放棄して、どこかに遁走してしまうのである。これは、偽善のはびこる学校社会において、「無鉄砲」にも自分の道を突き進み、結果、敗走の憂き目に会うという『坊っちゃん』の構図に似ている。

以上のごとく説明を続けているうちに、あることに気付いた。アルセストの議論には一定の正当性を見出すことができるのだが、それに対して坊っちゃんの考え方は滅茶苦茶なエゴイズムに過ぎない。つまりこの両作品は、主人公の性質に関して、根本的に異なっているのである。坊っちゃんの言動は豪快だが、倫理的に正しい訳ではない。『坊っちゃん』はつまるところ、自己中心的な人物が、誤った倫理観を根拠に田舎社会を弾劾するが最終的には返り討ちにあって敗走を余儀なくされる、という物語である。一体全体、こんなものがなぜ日本で最も愛されている文学作品の一つなのだろうか。筆者自らが考えることはなかったが、言われてみれば、こういう疑問を抱くことはごく自然なことだという気がする。ここにきて、筆者の『坊っちゃん』に対する偏愛は、全く説明のつかないものになってしまった。

だがひょっとすると、説明のつかないという非論理性にこそ、『坊っちゃん』の最大の魅力があるのかもしれない。嫌なことは嫌だとして世間を敵に回す坊っちゃんは、合理的な判断基準をもっていない。そんな彼をただ一人慕うのは女中のお清であるが、彼女の愛は盲目の所産である。物語の終わり方も、客観的に見れば主人公の敗北という明らかなバッドエンディングであるが、坊っちゃん本人は意趣返しを成功させて勝利した気になっている。最初から最後まで、とにかく無茶苦茶である。だが筆者には、それが何故か愉快痛快である。いや実は、この滅茶苦茶は、この小説の、物語上の必然なのではないだろうか。

よく知られていることだが、『坊っちゃん』の下敷きとなっているのは、西洋の合理主義を目指す近代化の精神と、それに抗う日本の古来の伝統的価値観、という二つの異なった主義主張の対立構造である。そして漱石の炯眼は、これが勝者なき戦いだということを洞察しており、だからこそ坊っちゃんは、勝利なき勝利を得て敗走するのである。考えてみれば、筆者もまた、西洋的な制度に規定された社会と、無骨な伝統精神との間に挟まれてもがき苦しむ日本人の一人なのかもしれない。ことあるごとにそのギャップに悩まされているから、

時にそのはけ口を文学に求めてしまうのだろうか。確かに、谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』のような日本の伝統美を讃える作品を好んで読んでみたりもするし、それもあるいは、上のような行動の一環なのかもしれない。いずれにしても、『坊っちゃん』を読むときに得られるのは、他では得られない特別な感覚である。無意識化に潜んでいる矛盾の塊が、まず顕在化し、そして次第にほどけていく、そのような感覚である。

この感覚を試みにカタルシスと呼ぶならば、そのカタルシスに大きく貢献しているのは、漱石の圧倒的な諧謔精神だと言えよう。例えば、「沖へ行って肥料を釣ったり、ゴルキが露西亞の文学者だったり、馴染の芸者が松の木の下に立ったり、古池へ蛙が飛び込んだりするのが精神的娯楽なら、天麩羅を食って団子を飲み込むのも精神的娯楽だ」という坊っちゃんの心の声がある。この坊っちゃんの理論は単なる屁理屈だが、その屁理屈は笑いを喚起するものだ。嘲笑の対象となっているのは、まず西洋文明にかぶれた田舎社会の薄っぺらさであり、また同時に坊っちゃん当人の無知でもある。「笑い」はずなわち複数の方向性をもつのだ。それ故このセリフは、ただならぬ風刺となり、筆者に対しては感動さえ呼び起すものとなる。ところが、こうした複雑かつ崇高な諧謔精神は、当然のことながら、日本語においてのみ成り立つ代物である。イタリア語に翻訳された『坊っちゃん』を読んだ人間にその魅力が伝わらなかったのも、ある意味では、至極当たり前のことだったのだ。

さて、愚鈍な筆者も、『坊っちゃん』の魅力の大部分がイタリア人に伝わりえないものだと、いつ頃からか感じていた。そこでとりあえずこの小説をイタリア人にプレゼントすることは止めたのだが、それでも、どうにかしてあの日本文学の素晴らしさを伝えたいという欲求は捨て切れなかった。ああでもないこうでもないと考えあぐねた末、辿り着いたのは、『坊っちゃんの時代』という劇画である。作画を担当した谷ロジローはヨーロッパでも名の知れた漫画家だから、彼らになじみがあるだろう。漫画であれば理解もしやすいに違いない。これを読んで時代背景を踏まえた上で、あわよくば再び『坊っちゃん』にトライしてもらえないかもしれない。こう考えた筆者は、ナポリ滞在の最後の数か月、この漫画をお世話になった友人・知人にプレゼントしたのである。

実のところ筆者は、それまで『坊っちゃんの時代』を読んだことがなかった。だからこの作品を初めて読んだのは、これをプレゼントしようと思いついたときである。当然イタリア語に翻訳されたものに目を通したわけだが、そこである不思議な現象に出会ったので、そのことを紹介しつつ今回は筆を置くことにしたい。



【イタリア版『坊っちゃんの時代』*Ai tempi di Bocchan*】

ある不思議な現象とは、主人公の一人、石川啄木の次のような台詞にまつわるものである。すなわち啄木は、居酒屋で飲んでもくれるシーンにあつて、イタリア語で“Non capisco gli uomini, ma le donne le capisco ancora meno”という冗談を放つのである。これは、uomo(複数形は uomini)という単語のもつ両義性を利用した冗談である。uomoは第一に「人間」を意味し、第二に「男」を意味する。だから、“Non capisco gli uomini”のみを目にしたとき、普通これは「僕は人間が分からない」というロマン主義的な捨て台詞のように見える。ところが、その次に“ma le donne le capisco ancora meno”(「でも、女性の方がもっと分からないや」)という節が来ると、“uomini”は「男」を意味していたということになってしまう。壮大な人間論を語ろうとしているつもりが、いつの間にか女性の話になってしまう—これは、実に啄木らしい文句なのだが、日本語の原文は実はこれとは違う表現になっているはずである。というのも、uomoの両義性をもつ単語が、日本語には存在していないからである。

イタリア語でしか存在しえない冗談が翻訳本に現れたのは、何とも不思議なことである。言葉の垣根を越えて日本語の諧謔精神が翻訳家に乗り

移ったのだろうか。それとも全て、偶然の産物なのだろうか。機会があれば、『坊っちゃんの時代』のオリジナルを購入して真相を確かめてみたい。

【図版の出典】

http://www.neripozza.it/collane_dett.php?id_coll=2&id_lib=412

http://www.fumetto-online.it/ricerca_editore.php?EDITORE=COCONINO%20PRESS

(元当館スタッフ)

イタリアンレストラン紹介

～堀江～

リスタランテ / ピッツェリア

イルパッソ

都会の喧噪を忘れる一軒家レストラン。
落ち着いた空間の中で、贅沢なイタリア料理をリーズナブルなプライスでお愉しみてください。石畳の中庭、築100年を超えるシンボリックな土蔵、開放感あふれるガラス張りの1Fはバル&リスタランテ、2Fはパーティールームもあります。本場ナポリから、直接取り寄せた薪窯で焼き上げるピッツァがおすすめです。

特典: (日本イタリア会館会員証をお持ちの方)
コーヒー・紅茶サービス

住所: 大阪市浪速区幸町2-2-30

電話: 06-6561-1684

HP: <http://www.ilpasso.com/>



編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>